



大阪+知的障害+地域+おもしろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4402 号 2018.5.26 発行

みんなにやさしい LLブック知って 長崎市立図書館 朝日新聞 2018年5月25日



LLブックを紹介する長崎市立図書館の職員=2018年5月11日、長崎市興善町

「LL（エルエル）ブック」を知っていますか——。長崎市立図書館（同市興善町）では、読むことが苦手な人でも読書を楽しめるよう、さまざまな図書を用意している。図書館の職員に、どんな本があるか紹介してもらった。

海辺で偶然出会った若い男女。一緒にロールケーキを食べたり、怖そうな人から彼女を守ったり——。こんな恋物語が、写真だけで描かれる

本がある。昨春に出版された「はつ恋」（樹村房）。字を読むのが苦手な人でも読みやすいように作られた、「LLブック」の一冊だ。

LLは「やさしく読める」という意味のスウェーデン語の略。「ピクトグラム」と呼ばれる絵文字や写真が多く使われ、文章は全くなかったり、やさしく簡潔な表現で書かれています。1960年代にスウェーデンから欧州に広まり、日本でも近年、少しずつ出版が増えている。

元々はスウェーデン語が分からない外国の人や知的障害のある人向けに作られたが、最近では認知症患者や高齢者、読み書き障害（ディスレクシア）のある人といった、読書に困難が伴う人全般に対象が広がっているという。

子ども向けの絵本との違いは、中高生以上の年齢層も対象としているところだ。「はつ恋」のような恋愛もののほか、化粧の仕方や、地震が起きた時にどう行動すればいいかを説明する本もある。このように、障害を持つ大人が楽しめたり、生活していくのに必要な情報を得られたりする図書はまだ多くないという。

長崎市立図書館では9冊のLLブックを所蔵。職員が障害者サービスの研修を受けたり、県外の図書館と情報交換したりする中で本の存在を知り、一昨年に購入した。今後も冊数を増やすことを検討しているが、すでに絶版になっているものも少なくないという。

LLブックは同図書館1階の「大活字本」の棚に並ぶ。こちらは2008年の開館当初から図書館にいる「先輩」。視力の低い人や高齢者向けに大きな字で書かれており、書庫を含め約3千冊が所蔵されている。中には、視力の低い人でも読みやすいよう、文字の色を白、背景を黒に反転させた本もある。このほか、視覚障害者向けの点字本や、読み上げ機能のある「マルチメディアデイジー」と呼ばれるデジタル録音図書、触って楽しめる「布えほん」なども置かれている。

同図書館の担当者は「こうした図書は認知度が低く、本当に必要な人に届いていないのではと感じることがある。まずは存在を知ってもらい、色々な方に、色々な方法で本に触れてもらえれば」と利用を呼びかけている。（森本類）

障害者の就職 9.7 万人、17 年度、8 年連続最多

厚生労働省は 25 日、2017 年度に全国のハローワークを通じて就職した障害者は 9 万 7814 人（前年度比 4.9%増）で、8 年連続で過去最多を更新したと発表した。企業に義務付けられる障害者雇用率（法定雇用率）が 13 年に引き上げられ、企業が年々採用に積極的になっていることなどが背景にあるとみられる。

就職者の内訳は精神障害者が約 4 万 5 千人（前年度比 8.9%増）、身体障害者が約 2 万 7 千人（同 0.7%減）、知的障害者が約 2 万 1 千人（同 3.2%増）、発達障害者など「その他」は約 5 千人（同 9.3%増）だった。

障害者の就労意欲も高まっており、新規求職申込者数は約 20 万 2 千人（同 5.4%増）。今年 4 月には法定雇用率が 2.0%から 2.2%に引き上げられ、今後も採用数や求職者数が増加するとみられる。

「5 回妊娠、いずれも中絶」など強制不妊の聴覚障害者 6 人特定 兵庫県

神戸新聞 2018 年 5 月 26 日

旧優生保護法（1948～96 年）下で障害などを理由に不妊手術が繰り返された問題で、兵庫県内で手術を強いられた可能性のある聴覚障害者 6 人が特定されたことが 25 日、分かった。被害を訴えていた神戸市内の男性（79）ら 2 人に加え、県内の 50 代女性や但馬地方で暮らしていた夫妻ら 4 人が新たに判明した。

社会福祉法人「ひょうご聴覚障害者福祉事業協会」（洲本市）や県聴覚障害者協会（神戸市中央区）などが本人や親族らへ聞き取り、明らかになった。調査は今後も継続し、個人の特定がさらに進む可能性もある。

同協会によると、但馬地方で暮らし約 20 年前に亡くなった夫妻は、ともに聴覚障害があり、69 年ごろに手術を強いられたとされる。但馬地方では、すでに亡くなった別の女性の被害も分かった。ほかにも「5 回妊娠したがいずれも中絶した」「1 回目の妊娠で中絶を強いられ、2 回目は周囲に知らせず生んだ」などの事例が判明したという。

国の資料や兵庫県の年報によると、県内では 349 人が本人同意のない手術を受けさせられた可能性があるが、個人の特定につながる記録などは見つかっていない。今回特定された 6 人は、旧法に基づく手術だったかどうか分らず、国や県の数字に含まれたかは判然としない。

この問題を巡っては、「全日本ろうあ連盟」（東京）が聴覚障害者らを対象とした初の全国調査を実施。兵庫では同協会などが 5 月上旬から調査している。

兵庫県は 4 月下旬に相談窓口を設置し、これまで 2 件の相談が寄せられた。（田中宏樹）

「一步間違えれば大外れ」の緊張感 視覚障害の芸人、R-1 優勝の濱田祐太郎の可能性

産経新聞 2018 年 5 月 26 日

R-1 ぐらんぷりに優勝し、ポーズをとる視覚障害の漫談家、濱田祐太郎さん＝大阪市中央区（奥清博撮影）

今年の R-1 ぐらんぷりで優勝した視覚障害の漫談家、濱田祐太郎さんが先月 27 日のカンテレ特番「さんまのまんま春 SP」（午後 7 時 57 分）に登場。“お笑い怪獣”の異名を取る明石家さんまさんを相手に、デビュー 6 年目とは思えない堂々としたやり取りを展開しました。

■大御所の前で漫談披露

濱田さんは R-1 優勝後、同番組と TBS 「サンデー・ジャポン」に出演したいと話しており、早くも実現した格好です。番組では、さ



んまさんに手を引かれてスタジオに入ると、いきなり、さんまさんと樹木希林さんという大御所2人の前で漫談を披露することになりました。

さんまさんは「ホンマは見えてるんとかやうか?」「もう二度と来んなよ」と特別扱いはせず、後輩にズバズバ斬り込み、一方の濱田さんも「やりにくーっ」と応戦します。

そして、極めつきはさんまさんの「オレらの前で漫談やるってすごいことやぞ。永久保存版や。家へ帰って見いよ!」とのツッコミに、濱田さんは「はい、見ます。いや、見えへんねん!」。スタジオは大爆笑です。

■さんまの周到的な下準備

実は、この返しは濱田さんら若手が研さんする大阪の「よしもと漫才劇場」では“鉄板ネタ”。さんまさんは事前にチェックしていたのでしょうか。さすがというしかありません。

この後、左目が失明している樹木さんから「目が見えないのは一つの個性。焦らずにやったほうがいい」などとアドバイスを受ける一方で、R-1優勝をきっかけに彼女ができたことなどを告白しました。

実は、4月上旬の番組収録後、濱田さんを取材する機会がありました。今回の夢の対面について、濱田さんは「大先輩を前にして本番中は分かりませんでした。終わってから全身が硬直していたのに気づきました」と、うれしそうに振り返っていました。

■メディアは逃げるな!

僕は、濱田さんをめぐってはR-1優勝直後、知人のTVディレクター、藤光佳考さんがSNSに書き込んだ指摘がずっと心に残っています。

〈戦い続けた人(=濱田さん)がきちんと報われる良い結果が出ました。今度は平常時に、彼をどう起用し、どう見せていくのか。メディアの制作者が逃げずに戦わないといけない〉

3月の優勝後、「ノンストップ!」「ワイドナショー」「よ〜いドン!」「マルコポロリ」などR-1主催のカンテレ(フジ)系列だけでなく、「水曜日のダウンタウン」「ちちんぷいぷい」「せやねん!」「あさパラ!」「本能Z」「にけつツ!!」など相次いで登場しています。

ただ、濱田さんの所属事務所関係者は「ふつうR-1優勝なら、もうちょっと番組への出演が増えているはず...。世間の皆さんが評価してくれているのはありがたいですが、(メディアの人たちには)やはり構えられているのでしょうか」と漏らします。

■緊張する本当の理由

濱田さんも「僕はどんな舞台でも常に緊張感を持っていますが、それはウケるウケないだけでなく、一步間違えば大外れする、世間的に使ってもらえなくなるのではという緊張です。受け入れてくださる方が増えれば増えるほど、そうでない方の気持ちも強くなる。そんな気がしています」と素直に語っています。

かくいう僕も、彼へのインタビューでは言葉が出てこず、沈黙する場面が何度もありました。ただ、以前に別の記事で彼を「お笑い界に新たな可能性」と書きました。ありがたいな“温かさ”ではなく、一人の芸人として輝かせる方法はないものか。逃げずに考えたいと思っています。(豊田昌継)

伝統工芸、新たな担い手に=障害者ら技術磨く一京都 時事通信 2018年5月26日

後継者不足が深刻化する京都の伝統工芸の世界で、障害者が活躍している。西陣織やろうそくなど、職人の技の習得に特性を生かしながら挑み、伝統の新たな担い手として期待されている。

障害者施設「西陣工房」(京都市北区)では知的障害のある利用者らが、手織り機を使って西陣織を制作している。西陣出身の施設長河合隆さん(61)が、西陣織を守りたいという思いと、技術を磨ける仕事を障害者に提供したいという気持ちから2004年に開設した。工程の一つで、糸を枠に巻き取る「糸繰り」の受注は年々増え、今では西陣最大規

模の糸繰り工場に成長した。

河合さんは「低賃金で簡単な仕事に従事しがちな障害者はやりがいのある仕事を、伝統産業は人材を探している。技術を身に付ければ手をつなげる」と力を込める。

和ろうそくの老舗「中村ローソク」(同市伏見区)では、障害者の就労拡大を目的とする市の事業を活用し、精神障害のある浅野智さん(41)が昨年4月から絵付け師として働く。社長の田川広一さん(55)は、和ろうそくの継承には、減り続ける絵付け師の確保



が必要と感じていたという。
和ろうそくに絵付けをする浅野智さん=4月18日、京都市伏見区

「障害とは関係なく、職人として彼を見ている」と話す田川さんは、浅野さんの手掛けたろうそくを他の絵付け師のものと同様に販売している。浅野さんの絵を「見栄えが良い」と評価する。

注意欠陥・多動性障害(ADHD)など発達障害のある上田倫基さん(30)も、市の事業がきっかけで今年4月から、絞り染め「京鹿の子絞り」の老舗「絞彩苑 種田」(同市下京区)で働き始めた。「障害の特性上、同じことを繰り返す作業は得意。伝統工芸を残し、自分の特徴を生かせると思った」と話す上田さんは、検品などをしながら仕事を学び、6月から制作に携わる予定だ。「腕を磨きたい」と意気込む。

運営会社社長の種田靖夫さん(51)によると、制作は分業制のため、高齢化や後継者不足などで一つの工程が止まると、全ての作業ができなくなる恐れがある。種田さんは「伝統工芸士の資格を目指して」と期待を寄せている。

運動会で先生着用 作業所でシャツ作り

三田 神戸新聞 2018年5月26日
シャツに絵を描くメンバー=のぞみサポートハウス



障害者が通う福祉作業所「のぞみ事業所」(兵庫県三田市中町)が、市内の小学校など3校の先生が運動会で着るシャツに絵を描いている。無地のポロシャツとTシャツ計56枚にそれぞれの感性を生かしたデザインを描き、エールを送る。

事業所はNPO法人わかくさが運営。身体や知的、精神に障害がある36人が通う。シャツ作りは約20年前、高平小学校(同市下里)が子どもに障害への理解を深めてもらおうと、運動会用に注文したのが始まり。その後、富士小(同市富士が丘1)とひまわり特別支援学校(同3)にも広がった。

5月半ばから、事業所の出張所「のぞみサポートハウス」(同市三田町)などで作業。アクリル絵の具を使い、ピースサインのカニをたくさん描いたり、シャクナゲやバラの絵で飾ったり、1枚1枚丁寧に作っている。メンバーの名前や絵の説明、「運動会頑張ってるね」などのメッセージも添えている。高平小では26日、富士小とひまわり特別支援学校では6月2日に運動会が行われる。

積み木をモチーフに幾何学模様をデザインした男性(40)は「暑い中、運動会で頑張る先生を応援したいと思って作った。喜んでくれたらうれしい」と話していた。(山脇未菜美)

トウガラシ苗植え丁寧に入善高生ら700株

中日新聞 2018年5月26日

入善高校農業科の1年生約30人が、地元のJAみな穂青壮年部と入善町商工会青年部

のメンバーらと、同町入膳の入善中学校グラウンド北側約25アールのほ場に赤トウガラシの苗約700株を植えた。9月ごろに収穫し、乾燥、粉末化して一味トウガラシなどに



加工する予定。

赤トウガラシの苗を植えていく入善高の生徒ら＝入善町入膳で

農業と商業、学校が一体となって地域振興に取り組む「農・商・校連携事業」の一環。トウガラシの栽培は2009年にJAと商工会が始め、11年から入善高が加わった。13年には障害者福祉施設のNPO法人「工房あおの丘」も参加している。生徒はJA職員らの指導を受けながら、12～13センチに成長した苗を丁寧に植えた。定植後の栽培管理はJA青壮年部が担う。

収穫したトウガラシは「工房あおの丘」で乾燥させ、合同会社「善商」で「一味唐辛子げきから」の商品名で販売するなど連携して作業を進める。一部は地元の「入善レッドラーメン」の材料にも使われる。（渡部穰）

障害児通学 支援を 保護者らが知事に要望書 /滋賀 毎日新聞 2018年5月25日



障害児の通学支援に関する要望書を三日月大造・滋賀県知事（左端）に手渡す保護者ら＝滋賀県庁で、北出昭撮影

人工呼吸器などの医療的ケアが必要な障害児の通学支援を巡り、障害児の保護者らが24日、県庁を訪問し、三日月大造知事に本格的な支援事業の実施などを求める要望書を手渡した。三日月知事は「(支援策を) 研究し、着実に進めたい」と前向きな姿勢を示した。

県教委によると、特別支援学校に在籍し、人工呼吸器の装着や、たんの吸引などの医療介助が日常的に欠かせないため、通学のスクールバスを使えない重度の障害がある児童・生徒は昨年度で52人。保護

者はマイカーで毎日、子供を学校まで送迎しており、休まる間もないことから負担も大きい。

県は2014年、保護者らの要望を受け、介護タクシーなどに看護師が同乗し、児童らの送迎を代行する実証実験を開始。児童・生徒1人当たり年10回送迎し、子供の様子や問題点についてチェックをしてきた。

保護者らは「実証実験の5年目になる今年度こそ、本格実施への1年にしてほしい」「研究会議に保護者代表も加えてほしい」などと要望。参加した保護者6人全員が「保護者の負担軽減をより進めてほしい」などと訴えた。【北出昭】

着服 障害者作業所の所長170万円 利用者口座から /神奈川

毎日新聞 2018年5月25日

NPO法人「新(あらた)」は24日、運営する障害者作業所「ホップステップゆとり」(横浜市中区)の男性所長(45)が、利用者の口座から現金を引き出すなどして約170万円を着服していたと発表した。所長は全額返還したというが、法人は県警に相談している。

法人によると、男性所長は2016年4月～18年1月、40代の女性利用者の銀行通帳と印鑑を無断で使い、計約85万円を引き出したほか、14年から約4年間、利用者の

給食費などを着服。計約170万円を着服していたという。【国本愛】

大阪) 子育て相談、保健師に 大阪市版「ネウボラ」試行 朝日新聞 2018年5月26日

大阪市は今年、フィンランドの子育て支援の仕組み「ネウボラ」の試験導入を始めた。区役所の保健師が子育てに関する相談の総合窓口となり、必要な行政サービスにつなぐ狙い。2月から西淀川区で試行し、来年度に全市展開を目指す。

フィンランドのネウボラは、妊娠から小学校入学まで、担当の保健師が子育てに関するあらゆる相談を受け付ける。健康診断や医療機関への紹介もする。一つの家族を同じ保健師が継続して担当するのも特徴だ。

「大阪市版ネウボラ」では、各区に7～18人いる保健師が相談窓口になることを目指す。西淀川区は今年2月、母子手帳を交付する際に、区内の各地域の担当保健師の顔写真が入った案内文の配布を始めた。

吉村洋文市長は24日の定例会見で「親が産前産後にうつになっても、相談先が分からず、児童虐待につながることもある。保健師が顔の見える窓口となって、いろんな行政サービスにつなげたい」と話した。ただ、同じ保健師が継続して見守るフィンランドと異なり、大阪市の保健師には人事異動がある。吉村市長は「異動があるたびに前任から引き継ぎ、周知したい」としている。(左古将規)

皇太子ご夫妻、23年ぶり滋賀県訪問 医療福祉施設視察 京都新聞 2018年5月25日



脳性まひで電動車椅子を使う垣立麻衣さんに声をかけられる皇太子ご夫妻(25日午後3時8分、滋賀県米原市の市地域包括医療福祉センター「ふくしあ」)＝代表撮影

皇太子ご夫妻は25日、第29回全国「みどりの愛護」のつどい出席のため、滋賀県を訪問された。米原市内の医療福祉施設や、長浜市のヤンマーミュージアムを視察、快晴の湖北路を楽しんだ。

ご夫妻そろっての湖国訪問は、1995年の全国育樹祭以来、23年ぶり。お二人は正午前に新幹線でJR米原駅に降り立ち、長浜市内のホテルに移動。

雅子さまは、当初1カ所だった視察予定を変更、皇太子さまとともに2カ所訪問した。

米原市新庄の市地域包括医療福祉センター「ふくしあ」を訪問したご夫妻は、発達に気がある未就学児への絵本の読み聞かせや、特別支援学校などに通う児童・生徒のリハビリテーションを視察。電動車椅子の訓練に取り組む垣立麻衣さん(13)に、腰をかがめて視線を合わせ「こんにちは」とあいさつした。母親の秀子さん(49)は「お二人のまなざしがとても優しく、話せない麻衣が緊張せずにごくよい表情をしていた」と話した。

湖北の印象を「琵琶湖の壮大な風景や平成22年に登った伊吹山を車窓からながめ、懐かしく思い出しました」とコメントした。

ご夫妻は、26日午前、長浜市田村町の県立長浜ドームと湖岸緑地で開かれる「みどりの愛護」の式典に出席した後に記念植樹し、同日夕に帰京する。

群馬) 療養の日々を朗読 大学生が継ぐボランティア 上田学

朝日新聞 2018年5月26日

群馬県草津町の国立ハンセン病療養所「栗生楽泉園」の入所者自治会が発行する機関誌を、朗読して録音するボランティアを群馬大学生らが始めた。長年担ってきた地域ボランティアが高齢化などで活動をやめたため、後を継いだ。録音CDは他の全国12療養所に

も届けられる予定だ。



「息を継ぐところも大切」。西村淑子教授（右）に朗読の指導を受ける学生たち＝前橋市荒牧、群馬大荒牧キャンパス

機関誌「高原」は1946年12月に創刊、昨年まではほぼ毎月、今年からは隔月で発行する。今年3・4月号で808号を数え、入所者らの作っ



た川柳や俳句、詩のほか、同園を訪れた見学者の感想、園内日誌などが掲載されている。

朗読ボランティアは68年から続く。入所者は、病気の後遺症や年齢のため、目の不自由な人が多い。不自由な手先のため点字も読むのが難しい人が少なくない。近

隣の福祉団体のボランティアらが定期的に同誌を朗読・録音し、CD化してきた。

相模原の障害者施設殺傷 「やまゆり園」の追悼式7月23日 /神奈川

毎日新聞 2018年5月26日

県は、相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」が襲われた殺傷事件から2年となるのを前に、7月23日に追悼式を行うと発表した。県、相模原市、園を運営する社会福祉法人「かながわ共同会」の主催。一般の参列もできる。会場は同市南区の相模女子大グリーンホール大ホールで、午後1時半から。

式辞や黙とう、献花のほか、障害者らとの共生を目指して県が県議会とともに策定した「ともに生きる社会かながわ憲章」の朗読などがある。昨年の追悼式では、犠牲者の遺影や氏名の公表はなく、黒岩祐治知事が殺害された19人一人一人のエピソードを紹介した。今年への対応については今後検討するという。

一般の参列の申し込みは県のホームページかファクスで。6月15日まで。300人（先着順。定員になり次第締め切る）。問い合わせは県共生社会推進課（045・210・4961）。【石塚淳子】

生きることは美しい 写真家・河田真智子さん、障害持つ娘一瞬のきらめき撮り続け 前橋 /群馬

毎日新聞 2018年5月26日

娘が重い障害を持つ写真家の河田真智子さん（64）＝東京都目黒区＝は、生と死が常に隣り合わせの中で懸命に生きる娘の姿をカメラに収めながら、障害者や心の病を抱えた人の社会参加のあり方を問い続けている。5月12日、前橋市の社会福祉法人「すてっぷ」で県内の障害者支援施設の職員や市民ら約80人を前に、「生きることは美しい」と題して講演した。【杉直樹】

◆長女の夏帆さん（30）は1987年に仮死状態で生まれた。生後数時間でけいれん発作が出て重篤な状態になり、専門病院へ移された。「お母さん、赤ちゃんの顔に触ってあげてください」という看護師さんの声が震えていた。

赤ん坊の顔はマシュマロのようにふわふわでした。生後2カ月で難治性「點頭てんかん」の診断を受けました。最重度の身体障害と知的障害のため歩行や会話はできない。

1歳8カ月の時、先生と相談し、鹿児島県の沖永良部島に連れていきました。5歳くらいまで生きられるかどうかという予想だったので、思い出に残る風景が病室ばかりでは嫌だった……。

2歳から保育園に通い始めました。健常児の中に障害のある子どもを受け入れてもらったのは、東京23区で初のことでした。5年間通いましたが、実に大変でした。睡眠障害で午前には寝てしまうのですが、保育士さんに「親の生活態度が悪いからでは」と言われたり、幼稚園のお母さんらの中で浮いた存在になったりしました。

◆夏帆さんは通所施設などで多くのトラブルに見舞われるようになる。13歳の時、車椅子が転倒する事故に遭った。ミキサー食しかのみ込めないのに、刻み食を食べさせられて窒息しそうになった。

最もつらかったのは夏帆が20歳の時でした。通所先で、職員が食事のとりみ剤の使い方を間違え、食べ物が喉に詰まりました。本人は車椅子の上で体をくの字に曲げて苦しがあったそうですが、胃の中のを3回吐くまで食べさせられ続けました。吐いたものの一部が肺に入り、肺炎で3週間の入院となった。夏帆が将来、死ぬときは事故なのかもしれないと思うと怖くなります。

◆懸命に生き続ける娘の写真を2万枚以上撮影し、2013年に写真集「生きる喜び」を自費出版した。

写真は生と死の間を行き来している夏帆の瞬間を捉えます。どの写真も生きる喜びがあふれていた。これまで無我夢中で育ててきて、「大変」とか「つらい」とか思ったことはあまりなく、それ以上に「かわいい、かわいい」と愛が重なっていく。私たち夫婦は夏帆に支えられて生きてきたのだと気づかされました。

やまゆり園事件に衝撃

◆16年7月、相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が刺殺される事件が起きた。元職員の植松聖被告＝殺人罪で起訴、現在精神鑑定中＝は「障害者は不幸を作る」と一方的な持論を主張した。

かなりショックな出来事でした。「障害者は生きる価値がない」という主張がどんどんクロウアップされ、事件後は社会の差別が助長されたように思います。「被告は心の病気」という報道もあった。障害のある人が排除される、あるいは「心の病気のある人だから異常なんだ」と、もし決めつけられてしまうとしたら、これは何か考えないといけない。

心の病を持った人はたくさんいる。障害者も社会の中で生きている。障害を持った子の親になったんだから、そういう人が特別視されない社会を作れないかと自問しています。

◆昨年からは、基金を集めて看護学生や医療福祉に関わる人たちに出席授業をしたり、夏帆さんの写真集を届けたりする活動を始めた。

「障害があっても生きる価値はある」と伝えたいと思ったからです。障害の有無に関わらず、誰にでもかけがえのない「愛と日常」がある。(障害者と周囲の)信頼関係は現場からしか作れないと思います。

うちに来るヘルパーは帰る時、夏帆に「ありがとう」と言う。なぜそう言うのかと聞くと、「心が癒やされ、気持ちになる」と言ってくれました。娘は27歳で気管切開をし、苦しくても声が出せませんが、別の新しいヘルパーに、いつも3分間呼吸音を聞き続けてもらおうと、半年後には「たんが絡んでいる」と分かるようになりました。本人と心のコミュニケーションが取れることが大切だと思います。

事件後、私たちに託されたことは、「どんな人も生きることは美しい」ということに目を向けることではないかと思います。

